法　華　取　要　抄　　文永一一年五月二四日　　五三歳

扶桑沙門　日　蓮　之を述ぶ

夫 以 れば月支西天より漢土日本に渡来する所の経論五千七千余巻なり。其の中の諸経論の勝劣・浅深・難易・先後、自見に任せて之を弁ずる者は其の分に及ばず。人に随ひ宗に依って之を知る者は其の義を紛紕す。所謂華厳宗の云はく「一切経の中に此の経第一」と。法相宗の云はく「一切経の中に深密経第一」と。三論宗の云はく「一切経の中に般若経第一」と。真言宗の云はく「一切経の中に大日の三部経第一」と。禅宗の云はく、或は云はく「教内には 楞 伽経第一」と。或は云はく「首 楞 厳経第一」と。或は云はく「教外別伝の宗なり」と。浄土宗の云はく「一切経の中に浄土の三部経末法に入りては機教相応して第一」と。倶舎宗・ 成 実宗・律宗の云はく「四阿含並びに律論は仏説なり。華厳経・法華経等は仏説に非ず外道の経なり」と。或は云はく或は云はく。而るに彼々の宗々の元祖等杜 順 ・智儼・法蔵・ 澄 観・玄 奘 ・慈恩・嘉 祥 ・道朗・善無畏・金剛智・不空・道宣・鑑真・曇鸞・道 綽 ・善導・達磨・慧可等なり。此等の三蔵大師等は皆聖人なり、賢人なり。智は日月に斉しく徳は四海に 弥 る。其の上各々経律論に依り更互に証拠有り。随って王臣国を傾け土民之を仰ぐ。末世の偏学設ひ是非を加ふとも人信用するに至らず。爾りと雖も宝山に来たり登って瓦 石 を採取し、栴檀に歩み入って伊蘭を懐き取らば恨悔有らん。故に万人の 謗 を捨てゝ猥りに取捨を加ふ。我が門弟委細に之を尋討せよ。

夫諸宗の人師等或は旧訳の経論を見て新訳の聖典を見ず、或は新訳の経論を見て旧訳を捨て置き、或は自宗の曲に執着して己義に随ひ、愚見を 註 し止めて後代に之を加添し、株杭に驚き騒ぎ兎獣を尋ね求め、智円扇に発して仰いで天月を見る。非を捨てゝ理を取るは智人なり。今末の論師、本の人師の邪義を捨て置いて 専 ら本経本論を引き見るに、五十余年の諸経の中に法華経第四法師品の中の已今当の三字最も第一なり。諸の論師、諸の人師定めて此の経文を見けるか。然りと雖も或は相似の経文に狂ひ、或は本師の邪会に執し、或は王臣等の帰依を恐るゝか。所謂金光 明 経の「是諸 経 之王」、密厳経の「一切 経 中 勝 」、六波羅蜜経の「総持第一」、大日経の「云何菩提」、華厳経の「能信是 経 最為難」、般若経の「会 入 法 性 不見一事」、大智度論の「般若波羅蜜最第一」、涅槃論の「今日涅槃理」等なり。此等の諸文は法華経の已今当の三字に相似せる文なり。然りと雖も或は梵帝・四天等の諸経に対当すれば是諸経の王なり。或は小乗経に相対すれば諸経中王なり。或は華厳・ 勝 鬘等の経に相対すれば一切経中勝なり。全く五十余年の大小・権実・顕密の諸経に相対して是諸経の王の大王なるに非ず。所詮所対を見て経々の勝劣を 弁 ふべきなり。強敵を臥伏するに始めて大力を知見する是なり。其の上諸経の勝劣は釈尊一仏の浅深なり。全く多宝分身の助言を加ふるに非ず。私説を以て公事に混ずること勿れ。諸経は或は二乗凡夫に対揚して小乗経を演説し、或は文殊・解脱月

・金剛薩埵等の弘伝の菩薩に対向して、全く地涌千界の上行等には非ず。

今法華経と諸経とを相対するに一代に超過すること廿種之有り。其の中最要二有り。所謂三・五の二法なり。三とは三千塵点劫なり。諸経は或は釈尊の因位を明かすこと、或は三祇、或は動踰塵劫、或は無量劫なり。梵王の云はく、此の土には廿九劫より已来知行の主なり。第六天・帝釈・四天王等も以て是くの如し。釈尊と梵王等と始めて知行の先後之を諍論す。爾りと雖も一指を挙げて之を降伏してより已来、梵天頭を傾け魔王掌を合はせ三界の衆生をして釈尊に帰伏せしむる是なり。又諸仏の因位と釈尊の因位と之を糾明するに、諸仏の因位は或は三祇或は五劫等なり。釈尊の因位は既に三千塵点劫より已来娑婆世界の一切衆生の結縁の大士なり。此の世界の六道の一切衆生は他土の他の菩薩に有縁の者一人も之無し。法華経に云はく「爾の時の聞法の者、各諸仏の所に在り」等云云。天台云はく「西方は仏別に縁異なり、故に子父の義成ぜず」等云云。妙楽云はく「弥陀・釈迦二仏既に殊なる〇況んや宿昔の縁別にして化道同じからざるをや。結縁は生の如く成就は養の如し、生養縁異なれば父子成ぜず」等云云。当世日本国の一切衆生の弥陀の来迎を待つは、譬へば牛の子に馬の乳を含め瓦の鏡に天の月を浮かぶるが如し。又果位を以て之を論ずれば、諸仏如来は或は十劫百劫千劫已来の過去の仏なり。教主釈尊は既に五百塵点劫より已来妙覚果満の仏なり。大日如来・阿弥陀如来・薬師如来等の尽十方の諸仏は、我等が本師教主釈尊の所従等なり。天月の万水に浮かぶ是なり。華厳経の十方台上の毘盧遮那・大日経・金剛頂経の両界の大日如来は、宝塔品の多宝如来の左右の脇士なり。例せば世の王の両臣の如し。此の多宝仏も寿量品の教主釈尊の所従なり。此の土の我等衆生は五百塵点劫より已来教主釈尊の愛子なり。不孝の失に依って今に覚知せずと雖も他方の衆生には似るべからず。有縁の仏と結縁の衆生とは譬へば天月の清水に浮かぶが如し。無縁の仏と衆生とは譬へば聾者の雷の声を聞き盲者の日月に向かふが如し。而るに或る人師は釈尊を下して大日如来を仰崇し、或る人師は世尊は無縁なり阿弥陀は有縁なりと。或る人師の云はく、小乗の釈尊と、或は華厳経の釈尊と、或は法華経迹門の釈尊と、此等の諸師並びに檀那等釈尊を忘れて諸仏を取ることは、例せば阿闍世太子の頻婆沙羅王を殺し、釈尊に背いて提婆達多に付きしが如きなり。二月十五日は釈尊御入滅の日、乃至十二月十五日も三界の慈父の御遠忌なり。善導・法然・永観等の提婆達多に誑かされて阿弥陀仏の日と定め了んぬ。四月八日は世尊御誕生の日なり、薬師仏に取り了んぬ。我が慈父の忌日を仏他に替へるは孝養の者なるか如何。寿量品に云はく「我も亦為れ世の父、狂子を治せんが為の故に」等云云。天台大師の云はく「本此の仏に従って初めて道心を発こす、亦此の仏に従って不退の地に住す。乃至猶百川の海に潮すべきが如く、縁に牽かれて応生すること亦復是くの如し」等云云。

問うて曰く、法華経は誰人の為に之を説くや。答へて曰く、方便品より人記品に至るまでの八品に二意あり。上より下に向かって次第に之を読めば第一は菩薩、第二は二乗、第三は凡夫なり。安楽行より観持・提婆・宝塔・法師と逆次に之を読めば滅後の衆生

を以て本と為す。在世の衆生は傍なり。滅後を以て之を論ずれば正法一千年・像法一千年は傍なり。末法を以て正と為す。末法の中には日蓮を以て正と為すなり。問うて曰く、其の証拠如何。答へて曰く「況滅度後」の文是なり。疑って云はく、日蓮を正と為す正文如何。答へて云はく「諸の無智の人の、悪口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者有らん」等云云。問うて曰く、自讃は如何。答へて曰く、喜び身に余るが故に堪へ難くして自讃するなり。問うて曰く、本門の心は如何。答へて曰く、本門に於て二の心有り。一には涌出品の略開近顕遠は前四味並びに迹門の諸衆をして脱せしめんが為なり。二には涌出品の動執生疑より一半並びに寿量品・分別功徳品の半品、已上一品二半を広開近顕遠と名づく。一向に滅後の為なり。問うて曰く、略開近顕遠の心は如何。答へて曰く、文殊・弥勒等の諸大菩薩・梵天・帝釈・日・月・衆星・竜王等、初成道の時より般若経に至る已来一人も釈尊の御弟子に非ず。此等の菩薩・天人は初成道の時、仏未だ説法したまはざる已前に不思議解脱に住して我と別円二教を演説す。釈尊其の後に阿含・方等・般若を宣説したまふ。然りと雖も全く此等の諸人の得分に非ず。既に別円二教を知りぬれば蔵通をも又知れり。勝は劣を兼ぬる是なり。委細に之を論ぜば或は釈尊の師匠なるか、善知識とは是なり。釈尊に随ふに非ず。法華経の迹門の八品に来至して始めて未聞の法を聞いて此等の人々は弟子と成りぬ。舎利弗・目連等は鹿苑より已来初発心の弟子なり。然りと雖も権法のみを許せり。今法華経に来至して実法を授与し、法華経の本門の略開近顕遠に来至して、華厳よりの大菩薩・二乗・大梵天・帝釈・日・月・四天・竜王等位妙覚に隣り又妙覚の位に入るなり。若し爾れば今我等天に向かって之を見れば生身の妙覚の仏が本位に居して衆生を利益する是なり。

問うて曰く、誰人の為に広開近顕遠の寿量品を演説するや。答へて曰く、寿量品の一品二半は始めより終はりに至るまで正しく滅後の衆生の為なり。滅後の中には末法今時の日蓮等が為なり。疑って云はく、此の法門前代に未だ之を聞かず、経文に之有りや。答へて曰く、予が智前賢に超えず、設ひ経文を引くと雖も誰人か之を信ぜん。卞和が啼泣、伍子胥の悲傷是なり。然りと雖も略開近顕遠・動執生疑の文に云はく「然も諸の新発意の菩薩、仏の滅後に於て、若し是の語を聞かば、或は信受せずして、法を破する罪業の因縁を起こさん」等云云。文の心は寿量品を説かずんば末代の凡夫皆悪道に堕せん等なり。寿量品に云はく「是の好き良薬を今留めて此に在く」等云云。文の心は上は過去の事を説くに似たる様なれども、此の文を以て之を案ずるに滅後を以て本と為す。先づ先例を引くなり。分別功徳品に云はく「悪世末法の時」等云云。神力品に云はく「仏の滅度の後に能く是の経を持たんを以ての故に、諸仏皆歓喜して無量の神力を現じたまふ」等云云。薬王品に云はく「我が滅度の後、後五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶せしむること無けん」等云云。又云はく「此の経は則ち為れ閻浮提の人の病の良薬なり」等云云。涅槃経に云はく「譬へば七子あり、父母平等ならざるに非ざれども然も病者に於て心即ち偏に重きが如し」等云云。七子の中の第一第二は一闡提謗法の衆生なり。諸病の中には法華経を謗ずるが第一の重病なり。諸薬の中に南無妙法蓮華経は

第一の良薬なり。此の一閻浮提は縦広七千由善那八万の国之有り。正像二千年の間未だ広宣流布せざる法華経を当世に当たって流布せしめずんば釈尊は大妄語の仏、多宝仏の証明は泡沫に同じく、十方分身の仏の助舌も芭蕉の如くならん。

疑って云はく、多宝の証明、十方の助舌、地涌の涌出、此等は誰人の為ぞや。答へて曰く、世間の情に云はく、在世の為と。日蓮が云はく、舎利弗・目犍等は現在を以て之を論ずれば智慧第一・神通第一の大聖なり。過去を以て之を論ずれば金竜陀仏・青竜陀仏なり。未来を以て之を論ずれば華光如来、霊山を以て之を論ずれば三惑頓尽の大菩薩、本を以て之を論ずれば内秘外現の古菩薩なり。文殊・弥勒等の大菩薩は過去の古仏現在の応生なり。梵・帝・日・月・四天等は初成已前の大聖なり。其の上前四味・四教一言に之を覚りぬ。仏の在世には一人に於ても無智の者之無し。誰人の疑ひを晴らさんが為に多宝仏の証明を借り、諸仏舌を出だし、地涌の菩薩を召すや。方々以て謂れ無き事なり。随って経文に「況滅度後」「令法久住」等云云。此等の経文を以て之を案ずるに偏に我等が為なり。随って天台大師当世を指して云はく「後五百歳遠く妙道に沾はん」と。伝教大師当世を記して云はく、「正像稍過ぎ已はって末法太だ近きに有り」等云云。「末法太有近」の五字は我が世は法華経流布の世に非ずと云ふ釈なり。

問うて云はく、如来滅後二千余年に竜樹・天親・天台・伝教の残したまへる所の秘法何物ぞや。答へて曰く、本門の本尊と戒壇と題目の五字となり。問うて曰く、正像等に何ぞ弘通せざるや。答へて曰く、正像に之を弘通せば小乗・権大乗・迹門の法門一時に滅尽すべきなり。問うて曰く、仏法を滅尽せるの法何ぞ之を弘通せんや。答へて曰く、末法に於ては大・小・権・実・顕・密・共に教のみ有って得道無し。一閻浮提皆謗法と為り了んぬ。逆縁の為には但妙法蓮華経の五字に限る。例せば不軽品の如し。我が門弟は順縁、日本国は逆縁なり。

疑って云はく、何ぞ広略を捨てゝ要を取るや。答へて曰く、玄奘三蔵は略を捨てゝ広を好む、四十巻の大品経を六百巻と成す。羅什三蔵は広を捨てゝ略を好む、千巻の大論を百巻と成せり。日蓮は広略を捨てゝ肝要を好む、所謂上行菩薩所伝の妙法蓮華経の五字なり。九包淵が馬を相するの法は玄黄を略して駿逸を取る。史陶林の経を講ぜしは細科を捨てゝ元意を取る等云云。仏既に宝塔に入って二仏座を並べ、分身来集し地涌を召し出だし、肝要を取って末代に当て五字を授与せんこと当世異義有るべからず。

疑って云はく、今世に此の法を流布せば先相之有るや。答へて曰く、法華経に「如是相乃至本末究竟等」云云。天台の云はく「蜘蛛掛かりて喜び事来たり、鴉鵲鳴いて客人来たる。小事すら猶以て是くの如し、何に況んや大事をや」取意。問うて曰く、若し爾れば其の相之有りや。答へて曰く、去ぬる正嘉年中の大地震、文永の大彗星、其れより已後今に種々の大なる天変地夭此等は此の先相なり。仁王経の七難・二十九難・無量の難・金光明経・大集経・守護経・薬師経等の諸経に挙ぐる所の諸難皆之有り。但し無き所は二三四五の日の出づる大難なり。而るを今年佐渡の国の土民口に云ふ、今年正月廿三日の申の時に西方に二つの日出現す。或は云ふ、三つの日出現す等云云。二月五

日には東方に明星二つ並び出づ。其の中間は三寸計り等云云。此の大難は日本国先代にも未だ之有らざるか。最勝王経の王法正論品に云はく「変化の流星堕ち二つの日俱時に出で、他方の怨賊来たって国人喪乱に遭ふ」等云云。首楞厳経に云はく「或は二つの日を見し或は両つの月を見す」等。薬師経に云はく「日月薄蝕の難」等云云。金光明経に云はく「彗星数出で両つの日並び現じ薄蝕恒無し」と。大集経に云はく「仏法実に隠没せば乃至日月明かりを現ぜず」等。仁王経に云はく「日月度を失ひ時節返逆し、或は赤日出で黒日出で二三四五の日出づ、或は日蝕して光無く、或は日輪一重二三四五重輪現はる」等云云。此の日月等の難は七難・二十九難・無量の諸難の中に第一の大悪難なり。

問うて曰く、此等の大中小の諸難は何に因って之を起こすや。答へて曰く、最勝王経に云はく「非法を行ずる者を見て当に愛敬を生じ善法を行ずる人に於て苦楚して治罰す」等云云。法華経に云はく。涅槃経に云はく。金光明経に云はく「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に、星宿及び風雨皆時を以て行らず」等云云。大集経に云はく「仏法実に隠没せば乃至是くの如き不善業の悪王と悪比丘と我が正法を毀壊す」等。仁王経に云はく「聖人去る時七難必ず起こる」等。又云はく「法に非ず律に非ずして比丘を繋縛すること獄囚の法の如くす。爾の時に当たって法滅せんこと久しからず」等。又云はく「諸の悪比丘多く名利を求め国王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説かん。其の王別へずして此の語を信聴せん」等云云。此等の明鏡を齎て当時の日本国に引き向かふるに天地を浮かぶること宛も符契の如し、眼有らん我が門弟は之を見よ。当に知るべし、此の国に悪比丘等有って、天子・王子・将軍等に向かって讒訴を企て聖人を失ふ世なり。問うて曰く、弗舎密多羅王・会昌天子・守屋等は月支・真旦・日本の仏法を滅失し、提婆菩薩・師子尊者等を殺害す、其の時何ぞ此の大難を出ださざるや。答へて曰く、災難は人に随って大小有るべし。正像二千年の間の悪王・悪比丘等は、或は外道を用ひ或は道士を語らひ或は邪神を信ず。仏法を滅失すること大なるに似れども其の科尚浅きか。今当世の悪王・悪比丘の仏法を滅失するは、小を以て大を打ち、権を以て実を失ふなり。人心を削りて身を失はず、寺塔を焼き尽くさずして自然に之を喪ぼす。其の失前代に超過せるなり。

我が門弟之を見て法華経を信用せよ。目を瞋らして鏡に向かへ。天の瞋るは人に失有ればなり。二つの日並び出づるは一国に二の国王を並ぶる相なり。王と王との闘諍なり。星の日月を犯すは臣の王を犯す相なり。日と日と競ひ出づるは四天下一同の諍論なり。明星並び出づるは太子と太子との諍論なり。是くの如く国土乱れて後上行等の聖人出現し、本門の三つの法門之を建立し、一四天・四海一同に妙法蓮華経の広宣流布疑ひ無き者か。